



喫茶店  
文芸

2021年  
4月号

今月のお題

ψέμμα Lie Ложь  
Mensong 谎言 Emntira  
Lüge 嘘 بذك  
Insidae 虚妄 שקש Bugia

喫茶店文芸 2021年4月号——目次

ほろほろほろろ 優しい嘘つき 1

天野満 弁天、グッドラック、弁天 7

福原大輝 嘘の五索<sup>ウイソー</sup> 13

氷川省吾 なんでもヒットマン 19

ほろほろほろろ

優しい嘘つき



人の心がどのように生まれるか、皆さんはご存じでしょうか？

ここは人の心の中。嬉しい、悲しいなどの様々な感情や、あれがしたい、これがしたいという欲求の生まれる場所。これらは決して無から生まれるわけではありません。これらの源となるのは、心の中に住む小さな住人たちです。彼らは営みの中で感情や欲求の素を生み、それらによって人間の心は満たされるのです。

彼らの住むこの世界は全く無機質な空間ではありません。あなた方人間が思う以上に、彼らは個性的で情緒豊か。毎日繰り返し広げられるドラマの中で彼らは生活しているのです。今回は特別に、少しだけその様子を覗いてみましょう。

今回向かうのはこの世界の中央に位置する学校。この世界の住人にも世代が存在し、まだ幼い子らが自らの役割を学び、心の素を生み出せるように成長する場です。学校と言えば人間社会においても常にドラマの絶えない場所ですが、それはこの世界でも同じこと。さて、今回はどのようなドラマが見られるのでしょうか。

「ちよつとあんた！ いい加減ついて来ないでくれる!？」

おや？ 早速何やら聞こえてきましたね。今声を上げたのは『正直』を生み出す子のようにです。あの子のお陰で人間は真摯に振る舞えたり、誠実であろうとするのですよ。

そんな『正直』ちゃんは丁度校門から飛び出すなり、足早に歩いていきます。すると、その後を追いかける一つの影が見えませんでした。

「ま、待ってよお。一緒に帰ろうよお」

「嫌よ！ 誰があんたなんかと帰るもんか！」

「どうしてそんなにわたしのこと嫌うの？ わたし、あなたと仲良くしたいだけなのに」

「理由なんて簡単よ！ あたしは人を騙すことが一番嫌いなもの。だから、人に嘘をつくあんたとは仲良くなりたくない。分かったらもうついて来ないで！」

『正直』ちゃんはいびしゃりと言い放つと、さっさとこの場から去っていきました。残された子はしょんぼりと肩を落とし、暗い表情で俯いてしまいました。

この子は『嘘』を生み出す子。『正直』ちゃんの言葉通り、人を騙す『嘘』の素になる子です。二人の組み合わせは確かに相性は良くなさそうですね。『正直』ちゃんの言い分も理解できます。

ですが、拒絶された『嘘つき』ちゃんも可哀想なこと。一人残された彼女はとぼとぼと足を動かします。その背中中は小さく、触れれば崩れてしまいそうですが、私たちにできることはありません。それにしても、どうして彼女は自分と正反対の性質を持つ『正直』ちゃんと仲良くなりたいのでしょうか。

おや？ 今度は二つの影が校門から出てきました。彼らは『嘘つき』ちゃんを取り囲むと、何やら笑いながら話しかけ始めました。

「おいおい、お前まだあいつに付きまよってんのかよ。あいつの一体何が良いんだよ」

「そうだぞ。俺たち『嘘つき』とあいつじゃ相性が悪すぎる。仲良くなれるはずがねえじゃねえか、なあ？」

「で、でも……」

どうやら彼らは、彼女と同じ『嘘』のようです。悪意の嘘、打

算の嘘。彼らにはそれぞれ得意な嘘があります。嘘の中でも悪意や打算と聞けば、確かに『正直』ちゃんが仲良くしたくないと思いうのも頷けます。ですが、それを寂しいと思う子がいることも、この世界における確かな事実なのです。

『正直』ちゃんと『嘘つき』ちゃんの様子を幾度となく目にしてきた『嘘つき』君たちは流石に放っておけなくなり、しゅんと肩を落とす彼女に尋ねます。

「なあ、どうしてあんな奴に構うんだよ。ずっと拒絶されてるのに。辛いだけじゃねえか」

「それにお前は、まだ自分の得意な『嘘』を見つけられてないだろう？ そっちに集中したほうがいいんじゃないか？」

「そ、そうなんだけど……。何だろう。上手に言葉にできないけど、あの子のこと、何となく放っておけないというか」

「心配なのか？ 確かにあいつ、威勢の割に成績超悪いからな」

「全くよう、『嘘つき』のくせに優しいヤツだな、このこのお」

「ちよつと、やだ、突っつかないでよお」

からかうようにしながら『嘘つき』君たちは笑います。やはり同じ『嘘つき』同士仲が良いのでしょうか。少しの間和やかな空気が流れます。

ですがその後、『嘘つき』ちゃんの中から微笑みが薄れていきました。やはり『正直』ちゃんのことを心から離れないのです。どうしてそこまで彼女のことを気がかりとなるのでしょうか。『嘘つき』と『正直』は相反するもの。一見何も関連のないように思えますが。

そういうえば、『嘘つき』ちゃんはまだ自分の得意を見つけてい

ないそうですね。そのことと何か関係があるのでしょうか。……いえ、ここであれこれ思考しても仕方ありませんね。もう少し彼らを観察すれば自ずと見えてくることでしょう。

\*\*\*

あれから数日が経ちましたが、彼らの様子に変化はありません。『嘘つき』ちゃんは『正直』ちゃんと会う度に声を掛けますが、それに対する態度は相変わらずです。そんな、見ているこつちの気持ちやモヤモヤするような場面が何度も繰り返されたある日のこと、学校の様子を覗いてみると、校庭に何やら人だかりができています。ちよつと見てみましょうか。

「あ！？ お前もう一回言ってみろよ！」

「何度でも言っただけよ！ あんたたちみたいな悪党、この世界には要らないのよ！」

人の輪の中央にいたのは『正直』ちゃんと『嘘つき』君でした。口喧嘩は相当ヒートアップしており、周囲もいい加減仲裁に入ろうかとそわそわしていますが、白熱し過ぎて中々タイミングが掴めません。

「んだとこのヤロウ！ 俺たちだってこの世界の一部だ！ なくちゃならない存在のはずだろうが！」

「そんなはずないでしょ！ あんたらはただ悪意のまま嘘を垂れ流すだけじゃない。そんなことしたら、この世界が悪意に満ちて大変なことになる。授業で習わなかったの？ つまりあんたらはこの世界を濁らす汚物、邪魔な存在なのよ」

「くそッ！ 言いたい放題言いやがって！」

その時、『嘘つき』君が『正直』ちゃんの胸倉を掴みました。取り囲む子の中には、あわやと目を瞑る子もいます。

「お言葉だが『正直』さんよお、じゃあ俺たちがいなきやこの世界は平和になるのか？ 『正直』なだけじゃ上手く回らないのは実習の授業で分かっているだろ。お前の独り善がりな正義のせいでの世界がどれだけ危険な目に遭うと思ってる」

「あ、あの時はちょっと失敗しただけで——」

「正直者がバカを見る世界なんだよこは。だから俺たちがいる。相手を騙して出し抜く。そうしないと生きていけねえんだよ」

「そんな卑怯者みたいな真似許せるわけ——」

「そういう世界なんだよこは！ お前一人のちっほけな正義は、ここじゃ何一つ役に立ちゃしない！ お前の勝手なわがままで俺たちに迷惑かけんじゃねえよ！」

『嘘つき』君が激しく凄むと、あんなに強気だった『正直』ちゃんの目に涙が浮かびました。そして次の瞬間。彼女は唇をきゅつと引き結び、彼の手を払いのけてその場を去っていきましました。

広場に難しい空気が流れます。「流石にあれは言い過ぎだ」とひそひそ声が上がりますが、『嘘つき』君はそっぽを向きましました。彼の言い分は決して間違いではなく、無暗に非難されるものではないのです。

『正直』ちゃんと同じくその場を去った影はもう一つ。例の『嘘つき』ちゃんです。彼女も一連の諍いを目の当たりにしており、『正直』ちゃんのこと心配になり後を追っているのです。

駆けていった先は今使われていない旧校舎。果たしてここに

『正直』ちゃんがいるのでしょうか？

「ねえ、ここにいるの？ わたしだよ？ 出てきて」

寂れた教室を一つひとつ開けて、そして閉じていきます。『正直』ちゃんの姿は見えません。上の階にいるのでしょうか。『嘘つき』ちゃんも恐る恐る軋む階段を上ります。

「さっきの言い合いだけど、あの子も本気で言ったわけじゃない、と思うよ。あなたが頑張っているのは皆知っているから。だからそんなに気にしないで」

二階、三階へ上がると、微かなすすり泣く声が聞こえてきました。『正直』ちゃんは近くにいます。

「あの子はあなたのこと『役に立たない』って言ってたけど、そんなことないよ。あなたはこの世界にとって大事な存在だってこと、わたしは分かっている。だから」

最後の教室の戸を開きます。『正直』ちゃんはすぐ足元で膝を抱えていました。

「だからね、一緒に帰ろう？」

『嘘つき』ちゃんは前に立って屈み、『正直』ちゃんの肩に手を添えます。しかし彼女は顔を上げることなく、訥々と言葉を紡ぎます。

「……あたし、『正直』だから。誠実で正しいことが大事だって、そう育てられてきたし、あたしもそう思っている」

「うん」

「でも、それだけじゃダメなものも分かっている。『正直』なだけじゃこの世界は上手くいかないって、学校の実習で十分思い知らされた。それなのにあたし、あいつらが許せないのよ。自分の利益の

ために人に嘘をつくあいづらが。たとえば、この世界のためだとしても」

「……うん」

『嘘つき』ちゃんは静かに頷きます。何も言わず、じっと彼女の傍に寄り添います。じっと、次の言葉を待ちます。

「……ねえ、どうしてあんたは、あたしに優しくしてくれるの？」

「あなたと仲良くなりたいたいから。あなたの力になりたいから」

「これまで沢山酷いこと言っただけよ？ それなのにどうして」

「ううん、気にしてないよ。全然」

「……嘘、なんでしょ？ だって、あんたも『嘘つき』だもの」

『嘘つき』ちゃんの目が優しく微笑みました。

「嘘じゃないよ」

その一言は、静かに波紋を広げます。それに心が揺らされたのか、『正直』ちゃんは顔を上げました。その潤んだ目をしっかりと見つめ返し、『嘘つき』ちゃんはこれまでになく温かな笑顔を作ります。

「嘘じゃない。わたし、あなたと仲良くなりたいたいから」

「でも、あたしじゃ皆に迷惑かける。あいつの言っただけは正しいよ。『正直』なだけじゃ上手くないことなんて数えきれない。それでも、あたしにはそうすることしかできない。だってあたし、そういう風に生まれたから」

「大丈夫」

『嘘つき』ちゃんは彼女の手を握ります。安心させるように、包み込むように。

「これからはわたしがいるよ。わたしが、あなたのことを守ってあげる。もしもの時は、あなたの『正直』をわたしの『嘘』で包むから。そうすれば、これからはきつと上手いくよ、何事も」

「……本当？」

「本当」

「そっか。……やっぱり優しいね、あんた」

『嘘つき』ちゃんが恥ずかしそうにはにかむと、『正直』ちゃんもつられて笑顔になりました。

\*\*\*

その後、『正直』ちゃんと『嘘つき』ちゃんの二人は揃って学校へと戻りました。みんな安堵して胸を撫で下ろす中、少々バツの悪そうな子が一人。『正直』ちゃんと喧嘩をしていた『嘘つき』君です。二人を前にして、彼は居心地悪そうに視線を逸らします。

「ああお前ら、戻ったのか」

「うん、まあ」

『嘘つき』君だけでなく、『正直』ちゃんも気まずそうに手をもじもじさせています。あんな激しい喧嘩の後ですから仕方ないことです。しかし、二人とも何とか仲直りの言葉を探します。探して探して、見つかりません。

「えっと、さっきはその……」

「気にしてないって」

その時、『嘘つき』君の言葉に被せるように『嘘つき』ちゃんが言いました。残りの二人はぼかんとしています。

「さっきの喧嘩、水に流そうって二人で話してたの。この子もね、あなたと仲直りしたいんだって。ね？」

「え、ええ」

『嘘つき』ちゃんの言葉に促されるように、『正直』ちゃんは戸惑いつつ頷きます。

「その、さっきはいろいろ突っかかってごめん。周りのことと赤ちゃんと考えられてなかった」

「ほら、こう言ってることだし。だからあなたも、さっきの喧嘩は忘れて仲良くしよう？ その方がいいでしょう？」

その真っ直ぐな瞳に見つめられ、『嘘つき』君はその真意を察しました。そうなった以上、『正直』ちゃんの言葉でなくとも断るわけにはいきません。苦笑いをしつつ首を縦に振りました。

「ああ、そうだな。さっきのは無しにしよう。ただ、今回だけだぞ」

「ありがとう。それじゃ、わたしたちは行くね」

「おう……ちよつと待て」

そうしてすれ違おうとしたとき、『嘘つき』君が肩越しに呼び止めました。『嘘つき』ちゃんは半身になって振り返ります。

「お前もやつと見つけたんだな。自分の得意を」

『嘘つき』君はこれまでになく優しい笑顔を浮かべていました。その表情に一切の悪意は存在せず、ただ純粋な安堵と喜びで満ちていました。

「『優しい嘘』か。確かに、お前ら二人はお似合いだよ」

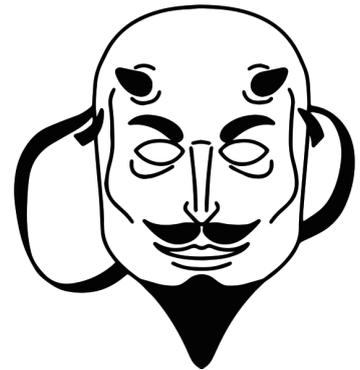
初めて掛けられた承認の言葉に、『優しい嘘つき』ちゃんももう一度笑ってみせました。

\*\*\*

いかがでしたでしょうか。今回は『嘘』と『正直』が中心のドラマでしたね。ですが、今回覗いた出来事はあくまでほんの一部に過ぎません。ここは人間の心の中、常に流動的に変化するこの世界はいかなる時でもドラマで満ちています。さて、次回はどんな日常が見られるのでしょうか。

天野満

弁天、グ  
ツド  
ラツク、  
弁天



俺は逃げているだけなのか、それとも立ち向かっているのか――。

悶々として眠れない夜、枕元で弁才天が歌を歌ってくれた。

「なるようになりませうさかいに」

関西弁で言うのであれば、そういう旨の歌詞で、かぶと虫の名を冠した世界的に有名なグループの歌だった。玉のように美しい声が、1kのアパートの部屋中に響いて、俺の胸に押し掛かっていた重苦しい闇が消えていく――。

そして、俺は決意を固めた。

グッドラック。

大阪・梅田の歩道橋、その欄干にもたれかかって、俺は呟いた。平成から元号が変わるらしい、と世間で話題になっていたころだった。

人生で初めて、グッドラックという言葉を使うにふさわしいシチュエーションに立たされている、と俺は思った。ピンと伸ばした親指の先には雲一つない夜空が広がっている。

なぜ俺は、こんなに芝居がかったことをしているのか？

早い話が、仕事を辞めたからである。

嫌で嫌で仕方なかった職を辞し、その解放感と未来への希望を胸に俺は「グッドラック」と呟いたのである。

〈Q〉天野満さんは仕事を辞した際に「グッドラック」と呟いたそうですが、なぜ「グッバイ」ではいけないかったのでしょうか。気になって夜も眠れず、苦しい日々を送っています。〉

俺の書いた文章を読んで、かのごとき質問を、インターネットの質問サイトに投稿する者が現れるかもしれない。

さらにはその質問者に、「自分で調べてみてはいかがでしょうか。何でも人に聞いてばかりでは成長しませんよ？」と、説教を垂れて優越感にひたる、痴れ者が現れるかもしれないが、俺はそんな事態を望んでいない。

なぜ「グッドラック」という言葉を選んだのか。

前の職場に対し、不満があったからと言って「辞めたらあ、死ねコノヤロー」と喚き散らして、職を辞するような愚か者ではない。なぜなら私だって、人並みに社会倫理を持ち合わせているからだ。少なくとも、そのつもりだ。

むしろ「大変お世話になりました」と、関係者各位に深い感謝を表明し、充分に引継ぎの期間を確保して、円満に職を辞せるように取り計らってきた。

いわゆる「シャカイジンのジョーシキ」に則っていたというのもあるが、何より円満に退職にこぎつけることこそが、相手と自分に幸福をもたらすのだと信じていたのである。

だからこそ「さようなら」を意味する「グッバイ」ではなく「幸あれ」を意味する「グッドラック」を選んだのである。

この別れは、きつと双方の未来にいい影響を与える、と信じて。

二カ月後、転職の都合で関西を離れ、福島県へ引っ越すことになった。

二十数年を関西で過ごした俺にとっては大きな事件だった。初

めて住む土地、初めての仕事。俺は不安で一杯だった。

俺が不安な未来に立ち向かう唯一の方法。それは愛する家族に、友に、故郷に、幸福を祈ることだと思った。誰かの幸福を祈ることが、人間にとって一番の力になる。人はそれを愛と呼び、勇気と呼んだ。

新幹線の車窓に飛び込んでくる風景にモノローグを浮かべながら、口にした二度目のグッドラック。

福島に来てから、たった二か月後の出来事でした。

俺はまた職を辞してしまった。

想像以上に仕事が苛烈で、飯の味がわからなくなり、知らない間に涙が頬を伝うようになった段階で退職を宣言した。

誰かに言われるでもなく、俺は自身を「根性無し」だと思っていた。だから、スーパーで安物の半紙、毛筆、墨汁を購入したるや、家に帰り、そればもう達筆な字で、「根性無し」と書いて、額に貼り付けてキョンシーごっこに興じていた。俺は死体だった。生きてるように死んでいる死体で、性根から腐臭が漂っていた。住んでいるアパートが外より寒いのは、暖房が壊れているから。これも寒くては愛も勇気も死ぬよね、と自分に言い訳したとき、自己嫌悪で嘔吐した。

〈未経験ですが、頑張ります！コミュニケーションは得意です！〉

嘘だ嘘だ嘘だ！どの口がほざいてやがる。新天地での生活に理想ばかり求めやがって、この甘ったれが。

根性を叩き直さねばならぬ、と、俺は脅迫的な観念に囚われ、「懲罰」と称し、次の仕事が見つかるまで、生活のレベルを下げることにした。

死体に布団は贅沢品だと、布団を廃し、段ボールと革ジャンと部屋のカーテンを布団代わりに生活していたのもこの頃である。食費は月に一万円までとし、大豆製品以外からはタンパク質の摂取を禁じた。風呂の使用さえ禁じて、台所で体を洗い、工作用のはさみで自分の髪をセルフカットしていた。

体重が減り続け、見てくれが汚い鳥のヒナみたくなったところ、縁あって私は福島県から愛知県に移り住むことになる。

懲罰の仕上げは、高速バスと在来線のみを使用した福島から愛知への移動である。東海道本線の車窓越しに見た弁天島の鳥居。そこに射す後光はきつと、俺の未来の光。

腰痛と睡眠不足に苦しめられながら、自分のためだけに呟く三度目のグッドラック。

愛知に来てからの日々といえば、穏やかなものだった。

食事の味がわからなくなることも無いし、意味もなく涙が流れることも無い。長期連休の際には新幹線で実家に帰ることも出来た。二か月で振られてしまったが、恋人も出来たし、入賞はしなかったけれども、長編小説を書いて投稿することも出来た。

もちろん、苦しいことが無かったわけではない。二次関数すらロクに理解していない自分には理系の職は困難なものであったし、秋になるとベランダにはカメムシが大量に飛来、屁をこいて私の衣服を汚染するのである。

そして、愛知に来て二年が経とうとしていた、ある夜、俺は弁才天に出会い、彼女なりのグッドラックを受け取った。それが冒頭の話である。

弁才天と邂逅した翌日、俺は職を辞し、関西へ帰ることを決めた。

ええええつ、マジ?となるのが尋常の反応であるかと思うが、私はいったって正気である。辞した理由は様々あれど、あえて書き物映えする理由を選ぶなら次のようになる。

〈弁才天が俺にくれた、グッドラックを信じてみたくなったから〉

「意味わかんねんだヨ!このジョブホッパー野郎が!」

私が偽らざる気持ちを上上げると、とヤンキー漫画の登場人物のようなセリフを吐きながら、殴りかかってくる人があるかもしれない。

「でも私はその拳を甘んじて受け入れます!」

と、今までの俺なら言うていたかもしれない。だが、今俺は自分の心に正直になったから、軽いフットワークで拳を避け、仕事を辞めて関西に帰るよ。

実際、会社の上司に退職を申し出た際には次のような引き止めを受けた。

〈自分に向いている仕事と言うのは自分で作るんだよ〉

〈君と同じような事情でやめていった人たちが一杯いたけど、みんな他の所でも転職を繰り返している〉

〈君はまだこの仕事の本当の面白さを知らないんだよ〉

たしかに、正論ではあった。現に俺は何も言い返すことが出来ず、ゲヒゲヒと愛想笑いをしていただけれど、私には、かつて辞めていった人々とは大きな違いがあった。

俺は弁才天に出会い、彼らは出会わなかった、ということである。

愛知から移り住んだは京都の西側、家賃2万のポロアパート。

ビル清掃員として人生をやり直す。もう二度とグッドラックなんて言わなくていい人生を送るために、考えに考え抜いた結論だった。そうそう間違っているなんてことはない。なんてったって弁才天が俺にはついてるから。

それはさておき、本棚が欲しい。

引越しの荷ほどきをしていたら、本が大量に持っていることに気が付いたのだが、本棚を持っていない私は、それらをすべて床に直置きしていたのである。

清掃をする人として生きていく以上、自分の住居が散らかっている、という自己矛盾が発生しないようにしたいと思ったのである。

思い立つや否や、私は家具屋で小さいがしっかりした本棚を購入、早速持ち帰って、家で組み上げたのである。

「うーん、見事な本棚。まさにグッド(な)ラックだな!」

やっちまった。高潔な誓いが、地面に落ち砕けて散った。欠片を拾い集めても、もう誓いが元に戻ることは無く、弃才天の歌声も忘れてしまった。

俺は逃げているだけなのか、それとも立ち向かっているのか――

今日も俺は自問自答を繰り返し、嘘と本当の境界線をピョーンピョーンしている。仕事という名のホッピングマシンに乗って。これが噂のジョブホッパー。こんなヘラヘラした生活をしてたら、いつ殺されても文句は言えない。

弃才天様、こんな俺の人生にも、もう「グッドラック」と言わなくていい日は訪れるのでしょうか。そんな日が来たら、俺の心は「グッと楽」になるだろうに。(了)



福原大輝

嘘  
の  
五  
索

ウ  
ー  
ソ  
ー



南四局オーラス。最終局だった。

タツヤは山の中から一つ、麻雀牌を威勢よくつかんだ。それを手元にある十三牌の中に加え、その中から不要な牌を一つ選んで捨てた。麻雀はこの「ツモる」動作と「切る」動作を繰り返して、自分の手の中で役を作り上げる、つまり、「アガリ」へと向かっていく、そういう競技だ。

正方形の机を四人が囲っていて、それぞれ自分の番になれば牌をツモっては切っていく。

タツヤはラスを引いていた、つまり点数が四人の中で一番低かった。

だからこの局で逆転しなければ、戦いに勝つことができない。大事な一局だった。

そしてタツヤの心はある思いでいっぱいだった。

——勝ってあの子と結婚するんだ！

彼には最愛の彼女がいた。

対局前、タツヤは彼女とお花畑の真ん中にいた。お花畑を囲むように小川が流れていた。春の陽気な日差しが射し込んでいた。そこで、彼は言った。

——結婚してほしい……。

いや、と彼女は言っ、首をふった。

彼女は麻雀が嫌いだった。麻雀は対局中に服を脱がされることだつてあるし、負けたらはずたずたに引き裂かれる罰を受けることもあるし、なんだかよくわからないと言っていた。たしかに、彼もその意味はよく分かっていた。だが彼は麻雀を愛してい

た。

次でやめる、これで最後にする、と彼は言ったが、これまで何度もそう言い続けて裏切ってきたから、彼女は信じてくれるはずがなかった。それでも。

——次で勝ったらやめるから。そして結婚しよう！

やけくそに彼が言うと、彼女が遠くを見た。彼がその目の向く先を振り返ると、小川に光が射してきらめいていた。それが答えだった。

——それはつまり、この戦いが終わったら結婚するということだ。

彼はそう頭の中で繰り返して、そしてツモる手に力がこもる。

左右の席に座る二人とは、切磋琢磨してきた仲だった。

時には、酒を酌み交わし、一緒に麻雀の熱い議論を深めてきた。熱を帯びたタツヤたちの注文を受ける時、店員が言った。

「単品ですか？」

「はあ？」

タツヤたちは目を剥いて店員をにらみつけた。タンピンだおらあ、とヤンキーのごとく各々が罵声を浴びせながら机を蹴りつけた。

どういふことかという、タンヤオ、ピンフの役のことを略してタンピンというのだ。

どうしてもアガれずに成績が振るわなかった時代に、役の名を聞いて過剰に反応してしまった、若気の至りである。そうして飲み屋に迷惑をかけてきた。あの店員には戦いが終わったら謝りに

行きたいと、切に思うタツヤだった。

左右の二人は、対局中なのに時折恍惚な表情を浮かべるタツヤを注視して、その奥に浮かぶお花畑と小川の映像を一緒に見ていた。心の中で、結婚するわけがないと感じていたが、そんなことはタツヤの知ったことではない。

そして対面は宿敵でもある、丸坊主だ。いつも対面にいるのだが、名前は知らない。そのアガリへの渴望はすさまじく、幾重にも策を巡らし、どんなイカサマでもやってのける。

だから、ここは先手必勝だ。

「リーチ！」

そう高らかに宣言したタツヤは、千点棒を机に投げつけた。

リーチとは千点棒を払い、アガリの一步手前だということを宣言することで、点数を割り増しする行為である。その代わり、ここから先は牌をツモって、それをそのまま切るか、アガるかしかできなくなる。

ただ逆に言えば、他の対局者がアガリ牌を切ったとき、タツヤにアガられてしまうという状況になるため、他の対局者にプレッシャーを与えることもできる。

自分でアガリ牌をツモった場合には「ツモ」と宣言し、他の対局者が切った牌でアガる場合は「ロン」と宣言する。

時には「ロン」と声が出なくなる瞬間もある。これまでの戦いの中で声を出せずに、見逃したこともあった。彼女との結婚がかかっているからだ。

タツヤのアガリ牌は五本の竹が描かれた牌だった。麻雀牌は一から九までであるが、その中で五の索子であり、五索と呼ぶ。嘘だ

と思うかもしれないがそれは本当のことである。ウーソーがくるまでタツヤは待ち続ける。アガれると信じて疑わなかった。

だが、その時、だった。

対面から「アンカン」の声が聞こえた。アンカンは四枚同じものを持つているときにそれを見せることで、点数を増やすことができる。

手の中から見せられた四枚はウーソーだった。

「ウーソー!!!」

タツヤは思わず叫んだが、冷静を装い、「ウーソーか、はは」と笑ってごまかした。だが心の中では焦りが渦を巻いていた。

なんだって！

麻雀牌は同じ種類が四枚しかない。つまりこの時点で、彼のアガリ牌がなくなってしまったということだ。

こちらを見てにやける対面の坊主に、彼はアガリ牌を見切られていると感じた。

もう終わった。勝てない。意識が遠のく中、彼女の顔とお花畑の映像が再び浮かんできた。

広がるお花畑の中に彼はいたが、彼女はさっきより遠くにいた。なぜだろうと目を凝らすと、なんとその横には対面の坊主がいた。

なんとという光景だ。

どうして、こんなことが起きるのか。

彼はお花畑の中で、二つの意味で絶望に打ちひしがれていた。だが、彼の彼女への思いは強かった。

——ふざけるな！その手を離せ！

タツヤは叫んだ。

彼の闘志に火がついた。

まだ負けが決まったわけじゃない。

誰もこの局でアガることがなければ、もう一局行うことができず。そうすればこの戦いは終わらない。タツヤは最後の希望を抱いて牌をツモった。

そうして最終盤まで誰も動きがなかったが、突然対面の坊主が、

「リーチ」と宣言した。悪い顔をしている。

——とうとう追いかけてきたか。だが最後まで逃げ切つてやる。

しかし彼は次の瞬間、牌をツモった手の感触に違和感を抱いた。信じられない。嘘だ。この牌がここにあるわけがない。

ツモった牌を目で確認するとそれは本当にウーソーだった。

五枚目のウーソーが手の中にある。麻雀は同じ牌は四枚しかないというのに、どうということなんだ。

対面の脇に置かれている四枚のウーソーを見た。それはルール上、内側の二枚は裏返しにして置かれている。その裏返しにした牌は本当にウーソーなのか？

今タツヤにある考えが浮かんだ。

それは、対面の坊主がズル、いわゆるイカサマをしている可能性だった。何らかの方法でウーソーを増やしたのだから。

イカサマはどう指摘したらいいだろうか。うっかりとしたプレイミスは「チョンボ」というのだが、それでいいのだろうか……。

でもやっぱりアガリたかったら「ツモ」を宣言すればよい。役

は手の中にできている。

アガったら点数を得ることができ、逆転につながる。その一方「チョンボ」を指摘すると流局、この試合はなかったことになり、チョンボした坊主は罰として点棒を支払うが、タツヤは逆転しないままに対局が終了する。

それは分かっているのに、「ツモ」と言えない自分がいる。なぜ迷う。

ツモか、チョンボか。

目の前にはあの小川が現れていた。

二つに分岐している。片方はツモの川だ。もう片方はチョンボの川。

そのどちらに彼女は待っているのか。彼には分からない。その先はまぶしい光でおおわれている。

ふつうリーチしているならば、ツモったとき、アガるか、その牌を切るかの二択だから、すぐに決断できるはずなのだ。タツヤの一時停止に異変を感じた各対局者が彼を見ている。

その視線の痛みを越えて。

ツモチョンボツモチョンボツモチョンボツモチョンボ……

頭の中で繰り返される呪文。そしてツモの小川の、その奥からかろうじて見えた、彼女の顔。

この戦いが終わったら……。

彼は高らかに叫びながら立ち上がった。

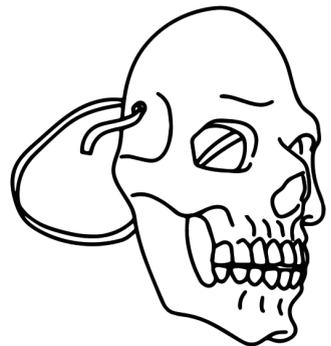
その指は対面の坊主を向いていた。

「チョンボ!!!」  
嘘は絶対に、よくないのだ。



氷川省吾

なんでもヒットマン



私のビジネスは、その日もいつものようにうまく進んでいた。商売が計画通りに進んでいることに満足した私は、電話を置いて秘書を帰らせ、その日の「業務」を終わらせた。

私の仕事場は自宅でもあるマンションのペントハウス。必要がない限りはここから出ることはない。必要な物はすべてそろっているし、足りないなら秘書に言うか、電話一つで持ってこさせられる。

ラウンジに行つて、ミニバーの棚からブランドーを取った。ヘネシーのパラディ。千ドルの高級品だ。これを遠慮なく消費できるのが、私のビジネスがうまくいっていることを示している。

今日販売したのは、ロシア製の携帯式地对空ミサイルを20セット分。これを東欧の民兵組織へ届け、入金が確認された。

先月は旧ソ連製攻撃ヘリの、サードパーティー製近代化改修セット、1個飛行隊分を東南アジアの陸軍へ。それと並行して、アメリカ製の第三十世代暗視装置をヨーロッパの民間軍事企業へ。

私取り扱っているものは、一言で表すならば軍需品だ。

自分で作った物を売るのはなく、売りたいと思っている側から買い付け、必要としている顧客に売り渡す。ディーラーとして様々な客へと物資を融通するのが、私のビジネスだ。武器商人ではあるが、武器兵器の本体のみならず、あらゆるものを扱う。銃の照準器、ボディアーマー、車両の装甲化モジュール、戦闘機の予備部品、暴徒鎮圧用の非殺傷接近阻止システム、装甲車の電子機器、その他もろもろ。大量破壊兵器や最新の大がかりなシステム以外なら、たいていの物は取り扱っている。

私がこの商売に関わってきたのは、まだ学校に通う前の子供のころからだ。私の父はある組織、つまるところマフィアの類の中で、武器の調達係を営んでいた。主に第三世界の軍事・警察組織から放出された余剰品や、横流しされた、あるいは故買屋や質屋から流された銃、弾薬、その他軍需品を組の武器や資金源として取り扱っていた。

警察のガサ入れを避けるため、父は「商品」の保管場所をしょっちゅう移動させていた。幼かった私は父の「お手伝い」として、中身も知らない箱をバンやトラックの荷台に移す作業をやっていた。

学校にはあまり行かなかったが、読み書き計算、その他さまざまな知識を学ぶ機会には事欠かなかった。複数の外国語、帳簿の知識、「商品」取引の方法。学校では学べないことも多かった。

18歳の時に父が取引時のトラブルで撃ち殺され、後を継ぐことになった。最初は銃だけだったが、様々な機会を得て扱う商品の規模を拡大し、今では一国の軍隊の装備に関わるまでになっている。もちろん、単純に自分の商才だけでなく、私持たざる技能を有する人材と巡り会えたところも大きい。

もうそろそろ60になるが、まだしばらくは続けていける。引退しても、このブランドーを嗜むのに不自由することはないだろう。

グラスを取ってソファに行こうと振り向いた時、そこに誰かが座っているのが目に入った。全く気配がなく、まるで最初からそこにいたのを私が見逃したかのように。

体がびくりとすくみ上り、ボトルとグラスを落としかけたが、

何とか踏みとどまった。

「高いんだろ。落としなさんなよ」

いるのは当然だと言わんばかりの落ち着いた様子で、ソファに座っている人物はボトルを指さした。そこにいた人物——私よりやや若いぐらいの男——は、私が良く知っている人物だった。だが、知っているからと言って安心できる相手ではない。

「……心臓に悪いな。もうそろそろ体がガタがくる年なんだがね」  
かろうじて平静を保った私に、彼はよく分かるよとでも言うように頷いた。

「悪かったね。別に殺しに来たわけじゃないんだが、それで死なれたらこっちも目覚めが悪い」

「殺しに来たわけじゃない」。普通なら冗談になるセリフだが、彼の場合はそうならない。

「飲むかね？」

ボトルを掲げてみると、彼は少しだけ考えてからイエスの意を示した。

「ありがたくいただきます」

私はグラスをもう一つ取って、彼が座っている位置から90度の位置に置かれたソファに座り、グラスとボトルをテーブルに置いた。なるべく落ち着こうとしていたが、無意識のうちに体が緊張するのを抑えることはできない。

「そう警戒しなさんな」

「君が何者か知っていれば、警戒するなという方が無理だろう。家に勝手に入ってこられた場合は、なおさら」

「君の所に私が入り出す証拠は、あまり残したくないだろうと

思ってたね。悪いが勝手に入らせてもらった。後で警備を怒らないでやってくれ。彼らはちゃんと仕事をしていた」

「それは理解している」

この男にかかれれば警備員などいないも同然だろう。過去に私と同じような立場の人間が雇っている警備を、何度も欺いてきている。小国の高官ぐらいならば影のように近づくことができる。

それほどの技術を持つていながら、彼の外見は非常に平凡だった。特徴を一言で表すならば「特徴がない」がそれだ。

中肉中背、黒髪、そこら中によくあるヘアスタイル。顔立ちは普通で、30代後半から50代半ばまでの男をたくさん集めて平均値を取れば、こんな顔になるだろうと思わせるような造作と表情をしている。平凡だが、年齢がはつきりしない。

その平凡さは、そのまま彼の武器となる。特徴に乏しい人間は、そのままでは何者でもなく、他者の印象には残らない。人ごみに紛れれば、いつの間にか姿が消えてしまう。

何者でもない者は、逆に少しの工夫を加えれば何者にもなることができる。白色のキャンパスには好きな絵を描くことができるように。

表情、態度、髪型、服装などを少し変えて一定の特徴を持たせれば、自分を違うカテゴリーの人間にすることができる。普通のビジネスマンから熟練ブルーカラー、官僚、企業主、ホームレス、マフィアの構成員、警察官、軍人にいたるまで。

そうやって仕事を成し遂げるのに適した何者かになり、消す相手に手が届く場所まで接近する。仕事が終われば、何者でもなくなつてどこかに姿を消す。それが彼だった。

私がグラスにブランデーを注ぐと、彼は早速手に取って香りを確かめ、楽しそうに笑って口に含んだ。私も自分のグラスに注いで、香りだけ味わった。いつもは私を陶然とさせる高級コニャックの香りだが、今はひどく無味乾燥なものに思われた。

互いに乾杯する間柄ではないし、我々には乾杯するべき出来事はない。互いにうまくいっているということは、誰かが不幸になつて悲惨な目に合うということだからだ。

「実に良いな。この年になつても、知らない世界というのが多いということを分からせてくれる」

「要件は？」

「いやなに、引退前の挨拶というやつだ。君には良くしてもらつたからな」

「退職金を請求しに来たわけじゃないのか」

「それで脅しに来たとも思つて、身構えていたのか？」

面白がるように言うが、真意が読めない。この男が何を考えていようと、それを察することができない人間はいないだろう。変装するときのように、彼は上辺の表情を完璧に操作することができる。それが何よりも恐ろしい、

本来なら、私がこうやって誰かと相対したとき、緊張するのはほぼ確実に相手の方だ。私は世界一とは言わないが、世の中の大多数の人間よりも大きな力を持っている。財力、権力、武力だ。

財力はこれから10回ほど生まれ変わっても、毎回遊んで暮らしていけるほどある。そこから生まれる権力も、税関や公権力の自分の都合の良いように一部を動かす程度には高まっている。自らと商売を守るため、優秀な元軍人、元警察官、元諜報員を雇っ

て作り上げたPMCによる武力もある。

だが、足りないものもある。私個人が持つ力。権力や財力の後ろ盾がない状態で、誰かと向き合ったときに場を制するための力。それが欠けている。

誰も私を知らず、電話もなくクレジットカードも小切手も使えない状態では、私は無力な初老の男に過ぎない。それを理解しているからこそ、私はなるべく自分の城を動かさないようにし、常に近くに部下を侍らせ、彼らとの連絡手段を保っている。

目の前にいる彼は、全く別の意味で強大な力を持っている。それは彼自身に帰結する暴力であり、私に欠けている力そのものだ。後ろ盾なく一対一で向き合ったとき、この男よりも強い人間はほとんどいないであろうことを、私は知っている。

彼は殺人を生業としている——正確にはしていた者だ。

約30年以上にわたつてこの仕事を続けてきた。自らの手で消した人数は200人を下らないはずだが、彼は武器を持たない。時には何人も一度にあの世へと送るが、拳銃もライフルも爆弾も使わない。

道具は常にその場にあるものを使う。文字通りその場にあるものだ。キッチンของ包丁、工具箱のレンチ、納屋の枝切バサミ、机の上のペンやボールペン、パソコンの電源コード、クローゼットの針金ハンガー、本棚の雑誌、洗面所のタオル。彼の手にかかれば、日常のありとあらゆるものが凶器になり、人を死に至らしめる力を発揮する。

彼のやった仕事の一部は伝説となっている。もちろん、彼自身がやったと話しているわけでもなく、それに関与した人間が言っ

たわけでもない。そんな口の軽い人間であれば、彼は今頃ここにおらず、どこかの刑務所の独房か、土の下か海の底にいたことだろう。

だが、状況からして彼がやったのだろうと思われる仕事知られている。そしてそのどれもが、非常に困難な内容ばかりだった。やろうと思えば、彼は10通り以上の方法で私を殺せるだろう。もちろん、誰かを呼ぶ暇もなく。

「金をせびりに来たとは思ってはいない。何を目的にしているのか分からなかったから警戒していた」

「さっきも言った通り、ただの挨拶だ。それに君の場合、交渉するまでもなく十分すぎるほどの金を出してくれたから、後で経費を請求する羽目になることもなかったからな」

「それだけの金を出すのに値することばかりだった」

私は彼に仕事を依頼するにあたって、惜しみなく金を払ってきた。言ったことに偽りなく、彼が仕事を成し遂げたことによって私を得る利益、あるいは防止できた損失に比べれば、彼に払った報酬は必要経費の域を出ない。

2年前にはアフリカ某国の軍の高官を始末してもらった。こちらが軍に卸した品の一部をちよろまかして、テロ司式に転売していた。私が直に販売しているかのように見せかけた上でのことだ。

私が各国の捜査機関や情報機関から目をつけられつつも娑婆にいられるのは、売り先の組織をそれぞれの国の法律で容認されている物だけにしてあるためだ。コソ泥じみた真似の罪を人に擦り付けられてはたまらない。

私が次の製品を納入する前に、高官は自分の執務室で椅子に

座ったまま死んでいるのを発見された。彼の左目には愛用の万年筆が突き立てられ、先端は脳の中樞まで届いていた。誰が基地の中の彼のオフィスにまで入り込んできて、見とがめられることなく抜け出したのかやったのかは全く分からなかった。

同じ年に中米の麻薬カルテルのボスの甥が、自分の屋敷の庭で死んだ。そいつは自分の兄と共に、私が南米から武器を買って流通させるルートにコカインの密輸を便乗させようとした。それで私が雇っている現地のパイヤーを脅迫した。

ただ乗りを目的に私の部下を脅迫するなどというのは以ての外だ。何より合法に武器を流通させるルートに、違法な品を紛れ込ませられるわけにはいかない。私の商売に寄生しようなどと考えれば、相応の結末が待っている。

結局、私の部下を脅した犯人は、喉をバツサリ切り裂かれて死んだ。凶器は庭に植えられていたリュウゼツランの葉だった。

それから30分も経たないうちに、脅迫に参加していた兄が屋敷の中で絞殺された。自分が身につけていたネクタイで、そのまま首を絞めあげられて窒息死したのだ。

折悪く、屋敷ではパーティーが開かれていた。犯人のめぼしは一切つかなかった。当然だ。

去年は北米で、アンダーグラウンド境界で有名なクラッキングの専門家を始末してもらった。こちらの仕事の情報を探ろうと、サーバーに侵入を試みたのだ。危ないところまで入り込まれかけたので、余計な事を知られる前に速やかに消えてもらった。

現場は路上で、凶器はその場に落ちていた街路樹の小枝だった。長さ15cm程度の広葉樹の枝は、後頭部から眉間の間を結ぶライ

ンを正確になぞるように突き刺され、クラッカーの延髄を破壊して生命にかかわる機能を停止させていた。

好奇心は猫をも殺すと言うが、なまじ腕がいいだけに死神を招いて、自分の寿命を縮める羽目になった。死神は鎌ではなく、小枝で命を奪い取った。

なんの比喩でも冗談でもなく、素手で軍事基地に潜入して高官を殺し、麻薬組織の幹部を殺し、電子の海の中にもぐっているクラッカーの居所を見つけて殺した。その腕を知っている人間で金と動機さえあれば、誰もが欲しがるとは人材だ。

私以外にもいくつか仕事の受注元はあるのを知っていたが、私はそれらのどこよりも高い報酬を支払っていた。一つは優先的に仕事を引き受けてもらうため。そしてもう一つは、その恐ろしい腕前が私の方に向かないようにするため。資本主義と自由市場の原則はこんな世界でも通用する。一番良い値を出したバイヤーが生き残る。

特に、私の場合には切実な事情があった。彼には私を殺すに足る理由がある。かなり昔の話な上に彼はそれを知らない——おそろく。だが、「落とし前」をきっちりつける性格の持ち主であれば、何十年経とうが関係ない。真相を知った際にどう動くかは予想ができない。目の届くところにいてもらい、十分な金を出してご機嫌を取り続けるとともに、こちらの役に立ってもらう方が安全な付き合い方だ。

それゆえに、前回の仕事で引退の話を切り出されたときは、優秀な人材がいなくなることへの残念さと、ひそかに恐れている相手が自分の制御下から離れることへの恐怖があった。彼は私の部

下ではなく、あくまで外部契約のフリーランスなので、止める権利もない。無理に引き留めるとかえって怪しまれるかもしれない。

引退にはまだ少し早いんじゃないかとさりげなく言ってみたが、年で以前ほど素早く動けなくなってきたと言われれば、止めることはできなかった。

「金を出してもらっても、それに見合うだけのサービスが提供できるとは限らなくなってきた。だから引退だ」

ブランデーをもう一口飲みながら、彼は言った。ごく当たり前の仕事の話をするような口調で。見た目にはそこの人間よりよっぽど健康に見える。私と大して変わらないはずだが、30代後半にも見えるし、年上であつてもおかしくないようにも見える。「その割には、今回は大した働きぶりだった。素手でマフィア一つ潰す人間にしては謙遜が過ぎる気がする」

私がそういうと、彼はブランデーグラスを机に置いて、首を横に振った。

「君もよくわかっていると思うが、昔と比べると動きが遅くなった。君の方は頭がしゃっきりしていればまだまだいけるが、こっちはそうもいかない。今回みたいな大きな仕事を頼んで、ヘマをされたら雇い主だって迷惑だろう？ 今回も少し危なかった」

「結果的にはうまくいった。あれは君以外、誰もできない」

引退前の最後の仕事として私が依頼したのは、東南アジアの華僑マフィアへの攻撃だった。彼らは東南アジアにおける私の売買ルートに乗っ取りを企んでいた。元軍人を多数抱え込んだ新興勢力で、急速に力をつけていることで知られた連中だった。

そこで、私は彼に仕事を依頼した。すぐに彼は現地に飛び、1

週間後には事務所にいた幹部とその取り巻き2人が始末された。凶器はコルク抜きとウイスキーが入ったショットグラス、被害者の一人が持っていたナイフだった。

その翌日、会食をしていた幹部と資金洗浄の担当者が、護衛と共にステーキナイフとワインボトルで殺された。ブレーカーが落ちて停電し、電気がついてみると全員が死んでいたのだ。

護衛はステーキナイフを喉に突っ込まれて、声を出す間もなくあの世行き。幹部は片方がロマネ・コンティのボトルで頭をたたき割られ、もう片方は割れてギザギザになったボトルの断面で喉を掻っ切られていた。1万ドルのワインが入ったボトルは、彼がこれまで使用してきた道具の中では最も高価な物だっただろう。

幹部の連続死に驚いたボスは、どこからかもたらされたタレコミを下に、実行犯が借りているアパートの部屋へと部下を送った。完全武装した8人の元軍人は、非常に的確な動きで部屋へと突入したが、それから30秒もかからずに全滅した。

標的となるべき殺し屋は部屋にいなかった。代わりに、武装した連中が突入する少し前に、中にスプレー缶が入れられた電子レンジが動き始めていた。加えて部屋のあちこちにはふたを開けたガソリン缶が置かれ、都市ガスの元栓が開けられていた。

結果は誰もが想像できる。覆面をしていた武装兵たちは、部屋に入った時の異臭に気づくのが遅れた。全員が入ったところで、電子レンジの中に入っていたスプレー缶は火花と共に盛大に破裂し、小型の燃料帰化爆弾並みの威力で周囲を吹き飛ばした。その炎は気化したガソリンと都市ガスに火をつけて、武装兵たちを黒焼きに変えた。

そしてその3日後には、彼らのボスがシャワールームで感電死した。いつの間にか、2本のワイヤーがコンセントから伸ばされ、1本がシャワーヘッド、もう片方がシャワールームの床に垂らされていた。シャワーから出てきた湯とボスの体、床に垂れた湯が回路を形成した瞬間、電流が駆け巡って心臓を止めた。

その時のボスの屋敷は、相次ぐ幹部の死と襲撃の失敗から、並みならざる嚴重な警戒態勢が敷かれていたのだが、ボスの死は丸1日ほど知られることはなかった。屋敷にいた護衛も手下も、全員が死体になっていたからだ。

凶器は今まで通り、そこら辺にあつたものばかりだった。レターオープナーやベルトで殺されていた奴もいれば、辞書で喉を叩き潰された奴や洗面所で溺死させられていた奴や、足を折られて肉の貯蔵室に閉じ込められ、そのまま凍死した奴までいた。

一連の彼の働きを経て、私の東南アジアにおける商売敵は瞬く間に殲滅された。東南アジアは、経済発展と領土欲を出してきた大国の動き対応した軍の近代化により、なかなか大きな旨味を持つ商売エリアとなっている。それを維持できたことによって私が確保した利益は決して小さくはない。

「外国でマフィアを丸ごと始末する仕事を受けることになるからね。千ドルでチンピラを消していたところと比べると、ずいぶんと遠くに来たな」

「もう30年にもなるか」

「君には銃を融通してもらっていた。2年ぐらいたったが」

今から30年前。私は父の仕事を継いだばかりのころで、国内外のマフィアや民兵組織に銃を売りさばっていた。

正規軍に装甲車用の遠隔制御型武器プラットフォームを販売している現在に比べると、小規模で公権力に怯えるネズミのような商売だった。当時はそれが嫌で、何とかして商売の規模を大きくしようと知恵を絞っていた。

彼と知り合ったのはちょうどそのころだった。当時の彼はまだ〇〇代前半の若造だったが、すでにいくつかの「仕事」をこなし、その腕前を高く評価したマフィアの親玉から継続して仕事を与えられていた。

基本的なやり方は現在と変わっておらず、変装して標的に接近して仕事をやり遂げ、その後はいつの間にかいなくなるというスタイルをとっていた。違ったのは、その時は武器として拳銃を使っていたという点だ。

彼の主たる顧客は偶然にも私の顧客でもあり、それが元で私は彼に仕事で使う得物を供給するようになった。

殺し屋には「いつも使う武器」などというものは存在しない。銃を撃てば、残された弾丸には銃身内部の溝によって線条痕と呼ばれる傷が残る。線条痕は銃によってそれぞれ違う——たとえ同じメーカーの同じ種類の銃であっても——ので、同じ銃を使えば弾丸からそれが分かってしまう。

凶器が同じであれば警察は連続殺人とみなして追跡を強め、武器の入手ルートもたどられやすくなる。万が一捕まった時に手元にその銃があれば、今までやった仕事が芋づる式に判明してしまう。

それゆえに、一回仕事に銃を使えば、それは即座に処分しなくてははいけない。もちろん、何かの拍子に武器を現場に残したとき

の対策のため、入手経路が追跡できないように、製造番号を酸で処理するか削り取るかして消した、中古であり新しくない種類の銃であることが望ましい。そしてもちろん、ポンコツの安物ではなく、しっかりと作りの正規品でなくてははいけない。

そういうものを継続的に入手できる私の存在は、彼にとっては非常に便利だった。私としても、自分が供給した品で顧客の面倒ごとを解決する人物が活躍すれば、それだけ客が臍にしてくるので都合が良かった。

そうやって2年ばかり銃を供給していたが、ある時を境に彼は銃を使わなくなった。それと時を同じくして、ある男のうわさが流れた。ペンだけで3人を殺し、ベルトを使って銃を持った護衛の首をへし折った挙句、新聞紙で標的を殴り殺した。言うまでもなく彼の仕業だった。

拳銃という一般的な手口を使っていた若造と、その場にあるもので銃を持った敵さえ殺す凄腕を結び付ける人間は誰もいなかったが、日用品で命を絶たれる人間がちよくちよくと出てきたことで、密かに「そういう手口」の使い手がうわさになった。もつとも、凶器が毎回違う上に、目撃者は誰もおらず、時には自殺や事故と見分けがつかないこともあって、その存在すら定かではなかった。そうやってしばらくたったころ、商売の規模を大きくした私が、仕事上のトラブルからある人物を秘密裏に——私が関与していないと明らかな形で消さねばならなくなったとき、彼の存在を思い出してコンタクトを取った。優秀で目立たず、それでいて私とは直接の接点がない人物として。

「最初に依頼を受けたのは、5年ぐらい経ってからだったな。最

後に銃を用意してもらってから」

「中東からの放出品を売ろうとしたら、輸出先の役人が一枚かませろと言ってきてね。こっちの利益が出ないぐらい値下げして全部寄越さないと、私が化学兵器を売っているとたためをばらまくとか脅してきた。がめついい奴が多くて困る」

「そのおかげで、私は仕事に困らなかった」

彼は再びブランデーグラスを手にして、ゆっくり香りをかいで残りを飲み干した。私のグラスの中身は全く減っていない。私が彼のグラスに追加を注ごうとしたが、彼は首を横に振った。

「気持ちはあるが、舌が贅沢を知ると困る」

「そうなれば買えばいい。金はあるんだろう？」

「確かに、君はたっぷり払ってくれた。そもそも、最初の仕事の際になぜ私を選んだ？」

「あの頃は、まだそういう仕事ができる人間のつてがほとんどなかった。背に腹は代えられんが故だったんだ。結果的には正解だった。＼＼で3人殺した。奴が君だと知った時は驚いた」

これは嘘だった。私はずっと知っていた。彼が1本のペンで瞬く間に相手を殺し、標的を始末するところを見ていた。連絡を取った時に背に腹を代えられなかったのは本のだが、周囲の物で殺しを行う人物が彼であることに見当がついていた。

関わり合いになるのはリスクがあることは承知していたが、同時に腕の確かさも理解していたが故の選択だった。

「それまで銃を使っていた奴が、いきなり素手で仕事をするようになるとはだれも思わないだろうからな。最初にやった時は、本当に偶然だった。君に銃の調達を依頼した、最後の仕事の時だ。

知っているかもしれないが、あれは東欧の奴らだったよ」

私はそれも知っている。そして、本来ならば、彼はそこで死ぬか、二度と立ち上がる事ができないほど痛めつけられた挙句に、警察に突き出される予定だった。

私はその手引きをしていた。

その時の彼の標的は、東欧系の犯罪組織の連中だった。グダグダになりつつあるソ連から各種の兵器を盗み出して外に売ることが主な「仕事」で、販路を何としても拡張したい私にとって重要な取引相手だった。

連中は彼の主な顧客であるマフィアの連中を始末して、牛耳っている港湾の設備を利用したいと考えていた。だが、まともにやり合えば外国人である自分たちの方が不利であることを自覚していた。そこでまずは向こうから手を出させ、それを利用して被害者としてふるまうことで、マフィア側の力を合法的に削ぐことを思いついた。

やり方は単純だ。マフィアにちよっかいを出して、自分たちに殺し屋を差し向けたくなる状況を作る。それを返り討ちにして、情報を洗いざらい吐かせた挙句に警察を介入させる。監視の目が強まれば、衰退せざるを得ない。

私の役割は、殺し屋が派遣されたことを知らせる内通者だった。彼から銃の注文があった時、私はそれを東欧の連中に伝えるとともに、銃に細工を施した。弾薬の雷管を叩いて火薬に火をつける棒状の部品——撃針——の先端部を、2mmほどヤスリで削り落としたのだ。わずか2mmだが、撃針が前進しても雷管には届かなくするには十分だ。銃を完璧に整備して、問題がない弾薬を

使っても、絶対にその銃を撃つことはできない。銃の重さも引き金の引き具合も同じだが、撃つことだけが出来ないのだ。

布にくるんで適当なブリーフケースに入れたそれを駅のロッカーにしまい、鍵を封筒に入れて指定されたところに置いておく。いつも通りの方法で私は銃を渡した。撃てない銃ではあるが。

鍵を改修したのを確認して、私は標的が殺し屋を待ち受けるために準備しているレストランへと行った。手筈では、私は監視カメラで、彼が入ってくるかどうかを監視し、それらしい人物がいれば報告する。変装をしているはずなので、顔写真だけでは判別できないから、雰囲気を知る人間が必要だ。

もう一つ、私が万が一にも裏切った場合は、即座に始末するという脅しの意味も込められていた。

私から連絡を受ければ、護衛がボディチェックを行い、銃を「発見」する。反撃して来ても、撃つことが出来ない以上は大した脅威ではない。数人でかかれば容易く制圧できる。猿芝居による出来レースで、本来ならば彼の命運は尽きるはずだった。

ところが、目算は大きく狂った。

当日、連中のボスが奥の個室で階段をしている最中に、40代に見える客がやってきた。私はそれが彼だと思ったが、入り口で護衛がボディチェックをしても、何も出てこなかった。

単にまだ来ていないのか、それとも別のルートで侵入するつもりなのか。

そう思った瞬間、客がカウンターの上のペンを手に取り、3人いる護衛の喉めがけて叩きつけた。画面越しに刃音はわからなかったが、喉にペンを突っ込まれた護衛が、目を見開いて喉を押

さえたまま前にぶっ倒れる様子のはっきりと映っていた。

残りの連中は何が起こったのか理解したが、客——殺し屋はペンを握った手を壁に当てて、護衛の一人の頭を掴んでそこに叩きつけた。ペンが後頭部にめり込んで、護衛は即死した。

最後の一人は立ち向かおうとしたが、逆に殴られた拳句にカウンターに頭を叩きつけられ、耳にペンを突っ込まれて肘を打ち下ろされた。ペンは完全に頭の中にめり込んでしまった。

私の監視役として部屋にいた護衛は顔を青くして外に飛び出していき、私の方はあつけにとられたままカメラの映像を見続けた。

これが後々まで語り継がれることになる、あの出来事だった。画面の中で、彼はラックに入れられていた新聞をいくつかまとめて取ると、それを固く絞って石のように丸めて即席の棍棒を作った。そのまま、堂々とレストランに入って、奥の個室へと歩いて行く。他の客の目に届かないエリアに入ったところで、私を監視していた奴を含む護衛が何人か飛び出してきたのだが、結果は最初の3人と似たような具合だった。

新聞紙の棍棒——いわゆるミルウォーク・ブリックでこめかみをぶん殴られて頭蓋骨を砕かれ、銃を取り出せば鞭のように振られたベルトが絡みついて動きを封じられ、喉笛を叩き潰された。ベルトをひっかけられて投げられ、頭から床にたたきつけられた奴、顔に巻き付けられてそのままひねられ、首がポッキリと逝った奴もいた。

そうやって相手をすべて血祭りにあげ、彼は標的がいる個室へと足を踏み入れ、1分ほどたってから出てきた。さすがに私も何

が起こったのかを理解して、厄介なことにならないうちに逃げた。

銃を使えない殺し屋を待ち伏せて捕まえるはずだったのが、ペンとベルトと新聞紙で自分たちが返り討ちにあった。策に溺れる者は策によって滅ぶと言うが、これは誰にも想像できなかったはずだ。

この一件で主だったメンバーがみんな死んでしまったせいで、私が裏で連中と手を組んでいたことを知る者は誰もいなくなった。そして、私の方は連中がいなくなったことで、彼らが使っていた販売ルートをもそのまま利用できることになり、かねてからの願望通り商売を大きくすることが出来た。マフィアの方も、厄介なよそ者がいなくなって満足したらしい。

そんな中で唯一の不安要素が、殺し屋が私の裏切りを知っていたのか、あるいはいつか知ってしまうのではないかということだった。

目が届く範囲に留め置けるようになったことで、少しだけとは言え安心できたが、やはり厄介なことになる前に消しておくべきかと思っただけでも何度かあった。だが、そのたびに監視カメラ越しに見たあの光景を思い出して止めた。

そして今、私にとって最も強力な武器であり、最も恐ろしい存在が、こうして引退の挨拶にやってきた。これは幸いと受け取るべきなのかどうかについて、まだ判断が出来ない。

「さて、そろそろおいとまするよ。酒をありがとう。実にうまかった」

その言葉を聞いた時、私は少なからず安堵した。彼の言葉通り、

私を殺しに来たわけでも、拷問しに来たわけでもないようだ。少なくとも、今ならあの事を聞いても、ブランデーのボトルで頭をかち割られることはないはずだ。彼が立ち上がったところで、私はついに踏ん切りをつけて口を開いた。

「少し待ってくれ。一つ聞きたい」

「何かね？」

「最後に銃を用意したときだが、なぜ使わなかった？」

「ああ、あのときか」

彼は少し困ったように頭をかいた。やはり気づいていたのだろうか。あの銃が撃てなかったことを。分解してよく観察すれば、直径0.5 m程度の撃針の先端部に、ヤスリをかけた跡を見出したはずだ。それを誰がやったのかということも、即座にわかっただろう。

「実は、仕事の前に失くしてしまっただけ」

「銃を？」

「いや、鍵を」

「……」

わずかの間だったが、言っている意味が分からなかった。そしてようやく、私が銃をしまっておいた、駅のロッカーの鍵のことだと理解した。

「宿から現場に向かう時だった。変装して銃を取りに行こうとしたんだが、そこで鍵が見つからなくなってね。宿に戻って荷物をひっくり返して、鍵を受け取ってから歩いてきた道や立ち寄った店を探してみたんだが、結局見つからないままだった。時間もないから、様子だけでも伺っておこうと思ったんだが」

「それで素手で乗り込んだのか？」

「結局はそれで正解だった。入り口でボディチェックされたからな。連中の方も何か感じていたらしい。店の中に入る前に銃撃戦になったら、確実に逃げられただろうな……。いや、向こうが準備していたら、銃を持っているとわかった時点でこっちが撃たれたかもしれない。ひとまず、何も持たなかったせいで命拾いした」

この男は、失くし物をしたために敵が待ち構えている場所に素手で乗り込み、生き残ったどころか武装した相手を始末したのだ。間抜けではあったが、悪運と実力がそれを上回った。

「そこで気づいたんだ。あたりにあるものを使えば、得物を持ち込む必要もない。ボディチェックも通り抜けられるから、非常に楽だったことに。道具の調達のために人を介する必要もないから、それだけトラブルも減る」

最後の言葉は、まるで私が仕掛けた工作に対する皮肉のように思われた。可能な限り面の皮を厚くして、それを気取られないように気を付けたが、それが通じたかどうかはわからない。

「仕事の前に、うっかり大事なものをなくしてしまうなんてこともなくて済むだろう？」

多分もう会うこともないだろうが。そう言って、彼は悠々と部屋から出ていった。入ってきたときと同じように、出ていくときも警備の連中の目にとどまることはないだろう。あれはそういう生き物なのだ。

彼が立ち去った後、私はひどい疲れを感じた。誰かと会って命の危険を感じたまま話をするなどという体験は、かなり長い間し

ていない。さっさと寝るべきだと思い、まずはシャワーを浴びるべくバスルームに行った。

部屋の電気をつけたとき、洗面所に不釣り合いなものが置かれているのが目に留まった。大型の軍用自動拳銃。やや古い型で、今では扱っていない。

銃はいざというときのために部屋に置いているが、こんな場所に置いた憶えもない。だが、私はその銃を知っていた。30年近く前に、私が彼に渡す予定だった9mmだ。

銃の下にはメモが挟まっていた。  
“不良品につき返品”。

私は急いでオフィスに戻り、PCを起動した。銃を置いた相手の口座に、前回の仕事の報酬の倍の金を振り込んで、ヘネシーのバラディを送る手続きをした。

こんな商売だが、やはり顧客に嘘をつくのは良くない。危うく死ぬところだったのだ。

発行 喫茶店文芸  
監修 マサユキ・マサオ  
編集 氷川省吾



喫

茶

女

店

芸

2021

年

4

月

号